

特集 人と生きる いのちの現場で

生と死の傍らで働く人たちの目には、始まりから終わりまでまぶしく輝く命の姿が映っていました。



5歳の幸羅ちゃんとは1歳の時に出会った

田中さんが訪問看護師になったのは25年ほど前。総合病院の50人以上が入院する病棟で働いていた時に、末期がんの患者から「忙しそうだね。でも、本当はもう少しゆっくり話を聞いてほしいんだ」と言われたことがありました。どうすれば良いの

「幸羅ちゃん。おやつの間だよ。優しい笑顔で少女に声をかけるのは、訪問看護師の田中さん。「赤ちゃん」の頃は呼吸器が外せなかった。今は口からご飯を食べる練習中なんだよね」と、幸羅ちゃんの成長を喜びます。

訪問看護師

田中和子さん
(53・元町)

か考えていた時、知り合いの訪問看護師と話す機会があり、必ず患者や家族と話せる時間があると知り、訪問看護師になることを決意しました。訪問看護を始め、患者や家族とのコミュニケーションをとると、家庭ならではの悩みを相談されるようになりました。家族でも病院と同じように患者の体を拭けるよう電子レンジで蒸したタオルを作ったり、家族が扱いやすいよう医療的ケアに使う管を短くしたり、話を聞きながら最善の方法を見つけられています。

患者さんから学ぶ日々

4年ほど前、肝臓がん末期の男性患者と妻から「毎年2回行っている、恒例の旅行に行きたい」と相談されました。心配しながらも、医師や周りのスタッフと念入りに打ち合わせを重ね、1回目は無事に帰って来



産後の不安や悩みを丁寧にサポート

助産師

曲淵 貴子さん
(58・及川)

「赤ちゃんかわいいですね」「お産はどうでしたか」。産婦さんに笑顔を向けるのは、助産師の曲淵さん。市内の産婦人科で分娩介助や赤ちゃんの世話、出産後相談などに従事しています。曲淵さんが助産師を目指そうと思ったのは、看護学校の実習で分娩に立ち会った時。「こんなにたくさんの笑顔に触られる医療現場は他にない」と、

命の誕生は奇跡

新たな命が誕生するのは、数億分の1の確率といわれています。曲淵さんは「妊娠初期に小さな心臓が動いているのを見た時が、まずはひと安心する瞬間。命の誕生は決して当たり前ではなく、奇跡みたいなこと」とほほ笑みます。命懸けのお産を終えて赤ちゃんを抱いた時の母親のほっとした顔や、緊張した面持ちで待っていた父親の表情がばあっと変わる瞬間を見るたび、無事に生まれて良かったと胸をなでおろしています。「病院が開くのは出産でひと段落だけれど、出産はゴールではなくスタート」と話す曲淵さん。妊娠時から見ているから

進む道を決めました。



体調を調べながらも、家にあるおもちゃや会話などで、相手を知る

られました。病状が悪くなっていくことを案じた妻が「絶対に帰って来ないと駄目なんだよ。2回目も本当に行くの」と問いかけるも、「行く」という答え。何度確認しても、男性の意思は変わりませんでした。何とか2回目の旅行から帰ってきた時、男性は疲れたのか、ぼうっとした表情。心配した田中さんが意識を確認するために目の前で指を振ると、男性はニヤッと笑い、Vサインをしてみせました。「やられた」と思っていた。命が終わりに向かっていたも、患者さんは私の想像よりずっと人生を楽しんでいた。男性はその3日後に誕生日を迎え、翌日に亡くなりました。「人は最期まで成長するんだと気が付き、胸を打たれた。田中さんにとって、忘れられない出来事の一つだと言います。「死は、人生の集大成なのかもしれない」と話す田中さん。迷うことがあっても、相手の思いを大切に、幸せに生きられる方法を模索する日々です。今日も田中さんは、一人一人と向き合うために、患者さんの元へと向かっています。

こそ、元気に育ってほしいという気持ちもひとしおです。

みんなで育てた方が楽しい

多くの出産に立ち会ってきた曲淵さんは最近、子育て世帯の孤立化が気がかりだと言います。個人の考えを尊重する風潮ができてきた一方、考え方の違いのためにコミュニケーションが高度化したと感じています。「価値観が多様化して、同じ考えの人を探るのが難しいのかもしれない。コロナ禍で付き合いを遠慮した結果、孤立してしまう場合もある」。関わった親子が虐待で問題になったこともあり「あの時、もっとできることがあったんじゃないかと考えると...」。35年の経験があっても、葛藤や迷いがなくなることはありません。

「本来、子どもはみんなで育てた方が楽しい。しんどい時は『助けて』って言っていいたいんだよと伝えたい」。日々、命の誕生に立ち会う曲淵さん。生まれる前も、生まれた後も、誰もが一人にならず生きていけることを願っています。



一人一人に向き合うため、助産師間で情報交換

人を社会につなぐ

ホスピスで緩和ケアのカウンセラーをしていた時、ある患者さんから「歌が好き」という話を聞きました。私にしか伝えていないようだったので、提案してみんなの前で披露してもらおうと、彼は朗々と独唱し、聴いていた全員が驚きと感動に包まれました。数日後に旅立たれましたが、生き続ける勇氣と希望を私たちに残してくれたと感じ、人を他者や社会につなぐことも、カウンセラーの大事な仕事だと学びました。苦しい事や嫌な事を話すと感情がリセットされるので、心のために大切です。ただ、つらい思い出は話しづらく、愛情を持って聴く人がいないと話せないこともあります。お互いに何げない悩みをおしゃべり合せて、心を大切に合せる世の中になればいいと思います。



臨床心理士 土屋 明美さん (71・元町)



人命救助を経験 福本 航大さん (19・妻田南)

命を助けられて良かった

2年前、高校からの帰宅途中で人が橋から落ちる現場に居合わせました。とっさに救急車を呼び、救急隊員と電話をつないだまま、川から引き揚げたけがの応急処置をしました。命が危うい状況になった時、周りの人の対応が大切だと痛感した出来事でした。無我夢中だったこともあり、人を救ったという実感はあまりなかったのですが、後日、消防署から無事だったと聞いた時は本当に安心しました。命が助かって本当に良かったです。

もどかしさ 忘れたくない

働いている病棟で、2020年からコロナ患者を受け入れています。看護は人に触れる仕事ですが、感染対策でそれがかなわず、もどかしいです。1人で隔離されていると認知症が進んだり、本来できることができなくなったりする場合があります、生命力と人との触れ合いは切り離せないのだと感じます。コロナ患者さんは面会ができず、亡くなくても体に触れて見送ることができません。本当にこれで良かったのかと日々葛藤しています。遺族の方に「最期、顔だけでも見られてうれしかった。ありがとう」と言われた時、救われた気がしましたが、「本当はもっとできることがあったのに」という気持ちを、看護師として忘れてはいけないような気がしています。



市立病院勤務 牧野 真秀 看護師

大人の見守りで犯罪を防ぐ

下校時の小学生を狙った事件をきっかけに、子どもたちが安全に通学できるよう、2007年に地域で見守りを始めました。今は共働き世帯が増え、保護者の目が行き届かない時間帯があります。犯罪が起こった時に追いかけて、捕まえたりするのは難しいですが、大人が子どもたちを見守ることで少しでも命の危険を減らせるよう、活動を続けていきたいです。



後列左から2番目が尾崎さん



戸室小田急住宅自治会 「愛の目運動」 尾崎 俊朗さん (86・戸室)

私といのち

自分、家族、身近な人。命への思いや考えたことを聞きました。

子どもが成長する喜び

コロナ禍の出産は立ち会いができず、心細かったです。ミルクをあげたりおむつを替えたり赤ちゃんの世話をしていると、私が守らないと生きていけない命なんだと実感します。ささいなことでも心配になりますが、成長を見るときとおしく、初めて声を出して笑った瞬間は忘れられません。大変なことも多いですが、元気にすくすく育ってほしいです。



昨年出産を経験 山本 千夏さん (28・愛甲)

悩み相談や交流の場 子育て支援センター「もみじの手」

子育て支援センターは、子育て中や、子育てを始める家庭の支援施設です。保護者同士が気軽に交流できる子育てサロン室などがあります。



詳しくはこちら

子育て支援センター ☎225-2922

応急手当普通救命講習会

【日時】4月20日 9～12時
【場所】消防本部
【内容】応急手当の重要性、心肺蘇生法、自動体外式除細動器(AED)の取り扱いなど
【対象】市内在住在勤在学の中・高生以上15人 【費用】無料
4月3～10日に救急救命課 ☎223-9365へ。抽選。 ☎

いのちのサポート相談

【日時】4月 10日 ①13時～②14時～③15時～ (各回50分)
27日 ①9時～②10時～③11時～ (各回50分)
【場所】保健福祉センター
【内容】臨床心理士による、心の健康や人間関係の悩み相談など
【対象】市内在住の方各回1人 【費用】無料
4月 7日 26日までに健康づくり課 ☎225-2201へ。先着順。